

ユイスマンス研究

印象派絵画の評価について(1)

岩 渕 邦 子

1

Robert Baldick によると1881年頃—ユイスマンスは1881年1月末《En ménage (世帯)》を出版した—ユイスマンスの居間の上座には Degasと Forain の絵が、仕事部屋にはCézanneの静物, Ralfaëlli の風景画, Constantin GuysとFélicien Rops のデッサンが飾ってあったという¹⁾ この事は近代絵画に対するユイスマンスのよい趣味を雄弁に物語るものである。一方批評活動についてみれば彼はすでに1867年11月, La Revue mensuelle にバルビゾン派の作品を論じたものを発表しているがその批評は完全に中立的な態度に終始したものだだったという²⁾ この頃ゾラはルーゴン・マッカール叢書のきっかけとなったともいうべき《テレーズ・ラカン》を書き上げていた。ユイスマンスは当時19才で大学で法律の勉強を続けるかたわら内務省に見習いとして勤め、一方ではカルチエ・ラタンにしげしげ通い La Revue mensuelle の演劇批評等を担当していた。³⁾

-
- 1) Robert Baldick, La vie de J.K.Haysmans, traduite par Marcel Thomas(Denoël,1958) p.81
 - 2) Ibid. p.93
 - 3) Marthe, histoire d'une fille(Paris, Le Cercle du livre,1955) préface

その後処女詩集、処女小説の発表も済ませ文壇に新人としての名も一応売り、2月には《ヴァータル姉妹》の出版にも漕着けた1879年に至るや彼は官展派の画家と作品を猛然と攻撃しだした。

大胆な批評を展開するようになったユイスマンスは批評活動を行なう時の信条としてディレタニスムを厳しく排除する。それは自分一己の趣味及び鑑識眼を有さないということを露呈するものでしかないからという意味のことを後に彼は明確に述べているが、画壇において又世評において未だ圧倒的な強味を有していた官展派の攻撃に正面きってのりだすには並々ならぬ勇気と自信を要することである。それを彼に与えたのはまさしくユイスマンスが近代絵画に抱いた強い興味であった。

ユイスマンスが近代絵画に強く惹きつけられるそもそものきっかけは、彼自身の述べるところによればどうやら1876年Degasの作品にうたれてからのことであると思われる。⁽⁴⁾

Je ne me rappelle pas avoir éprouvé une commotion pareille à celle que je ressentis, en 1876, la première fois que je me fus mis en face des œuvres de ce maître. Pour moi qui n'avais jamais été attiré que vers les tableaux de l'école hollandaise où je trouvais la satisfaction de mes besoins de réalité et de vie intime, ce fut une véritable possession. Le moderne que je cherchais en vain dans les exposition de l'époque et qui ne perçait, ça et là que par bribes, m'apparaissait tout d'un coup, entier.

(私は1876年この巨匠の数点の作品の前に初めて立った時味わったあの激

4) Oeuvres complètes de J.-K. Huysmans, VI L'Art Moderne (Paris, G. CRES ET C^{IE}, 1929) p.130

しい感動に比較できるような感動をかつて経験したことがない。現実味と私生活の表現を求めてやまない私は以前それを満たしてくれるオランダ派の絵にしか惹かれなかったものだ。私は心からの歓喜を味わった。私が当時どの展覧会に於ても求めて得られなかった現代性が、あちこちに断片的にしか散見できなかつた現代性が急に私の眼前にあらわれたのだ。)

Degasの作品に強い感動を覚えてから3年後ユイスマンスは活発に芸術批評活動を展開し始める。彼が1883年 Charpentier から出した《L'Art Moderne》はこの頃の批評を再録したものである。巻頭言⁽⁵⁾は次の通りである。

Contrairement à l'opinion reçue, j'estime que toute vérité est bonne à dire

C'est pourquoi je réunis ces articles qui ont paru pour la plupart dans Le Voltaire, dans La Réforme et dans La Revue littéraire et artistique.

(一般の見解とは逆に全ての真実は言うべきであると思う。こうした理由で私はかつてヴォルテール、レフォルム、ルヴェ・リテレール・エ・アルティスティックに掲載された大部分の記事を再録するものである。)

この本の登場は以前芸術評欄でユイスマンスから痛めつけられていた画家達を再び不快にさせたという。彼等はユイスマンスの痛烈な批評に傷つきながらも、それもいずれは古新聞と共に世の人々から忘れ去られるものと安心していたのであった。⁽⁶⁾これに関してユイスマンスは皮肉たっぷりの註を《L'Art Moderne》の本文中に挿入している。⁽⁷⁾

5) Ibid. p. 5

6) Ibid. NOTE p.304

7) Ibid. p.76

A la suite des nombreuses plaintes que suscita, dans le monde des peintres, la série de ces articles, M.Laffitte, direc-

このユイスマンスの芸術批評はその調子の激しさ、意見の的確さなどによって当時相当評判になったこと、そのみならずそれは又一つの芸術批評のタイプを示していて少なからぬ批評家がこれに刺激された等のことは前衛的な批評家を自認するFélix Fénéon⁽⁸⁾がユイスマンスに一目おいた事や、Roger Marx⁽⁹⁾が述べているところから明らかである。

批評の中味についてもユイスマンスがその才能を認めた画家については時期の早い遅いはあれ殆んど例外なく正当な評価を世間から与えられるに至っている。これに反し官立美術学校の教授や学長をつとめ多くの門下生を率いて時の官展の審査会の委員として絶大な勢力を揮った画家達を

teur du Voltaire jugea nécessaire de panser quelques-unes
des plaies qu'elle avait ouvertes.

Ce fut après la distribution des bons de pain et des médailles aux éclopés et aux mendiants de l'art, que M. Pothey fut chargé de préparer les compresse.

(これら一連の記事が画壇にひきおこした幾多の愁訴ゆえに《ヴォルテール》の編集長ラフィット氏は新聞がこしらえた傷口のいくつかに繻帯をしなければならぬと判断した。ポティ氏が湿布を用意するようにいつけられたのは芸術家面した糞たれや乞食達にパン券だのメダルだの配給されたあとのことである。)

- 8) イタリア生まれのフランスの作家。陸軍省の役人として生計をたてていた。象徴主義を早くから擁護したことで有名。1883年、《la Revue indépendante》を発足させVerlaine, Mallarmé の作品の発表の場をつくった。《la Revue Blanche》の編集も行なう。当時の文学や芸術についてすぐれた著述を残している。
- 9) ナンシー生まれのフランスの芸術批評家。前衛的な批評活動を行なった。1889年及び1900年の万国博覧会の演出を論じた著述、ユイスマンス論などがある。

ユイスマンスは何のためらいもなく才能なき者として酷評しているが、彼の慧眼を証明するかのようになり、実際彼等のうちで今日に至るまで絵画史上に重要な働きを残した画家として認められている人は皆無といってよい。

ユイスマンスが芸術批評家として筆がたつと共に外れることのない的確な予言をもちし得るところはまさにBaudelaire を想起させる由縁である。

Gustave Geffroy は《l'Art Moderne》(但しこれはユイスマンスの著作でなく当時の雑誌の名称である)の中でユイスマンスのこの批評集にふれ《Un terrible livre sur la production commerciale de ce temps-ci (今時の商業主義的制作を告発するおそろしい本)》と述べている。

ユイスマンスはPaul Bourget が加わっている《Parlement》にはどんな批評が掲載されるかと気にしていたといわれている。そのPaul Bourgetは《Du Moderne》と題する一反の中で《情熱のこもった、しばしば非常に鋭い、時として主観的な判断が強すぎる、しかし作家の思うところが卒直に述べられている本》と評した。¹⁰⁾

ユイスマンスと同時代の人々に良かれ悪しかれ鋭く作用した彼の《L'Art Moderne》は1880年近辺のフランス画壇に於てどんな才能がしのぎを削っていたかを明かし、それ自体一つの優れたフランス美術史上の記録としての価値を有している。

ユイスマンスの《L'Art Moderne》が印象派の画家達について知りたいと思う人々の期待に背かぬばかりか、個々の画家について色褪せない鮮明なイメージを与えて少しも時代遅れの感じを抱かせない事には驚かされるばかりである。

こうしたユイスマンスの芸術批評とゾラのそれとを対照させると一層前

10) ŒUVRES COMPLETES DE J.-K. HUYSMANS VI

L'Art Moderne (Paris G. CRES ET C^{IE}, 1929) NOTE p.307

者の特性、及び印象派の絵画そのものの性質が浮びあがってくるように思われる。

2

ゾラも又芸術批評を行なっている。もっともゾラの場合は芸術批評といっても時として建築や彫刻についても語るユイスマンス¹¹⁾とちがって絵画批評しかないようである。F.W.J.HemmingsとRobert J.Niessは、ゾラの1866年及び1875～1880年にわたる官展についての批評を中心に、その他マネ論を含む若干の芸術批評を再録して従来余り注目されなかったゾラの芸術批評家としての側面を明らかにしようとして《Salons》¹²⁾なる著を編んだ。

Hemmings等の意図はゾラの芸術批評家としての側面をことさらに強調することではなく、ゾラをより全面的に理解する為はその一助として散逸していたゾラの芸術批評を集めて今後の研究者にひきつごうとする極く控え目なものである。しかしこの著の伝えているゾラと印象派の画家達との関係、及びゾラが彼等に下している判断は貴重な資料として大きな価値をもっている。又この著に再録されたゾラの芸術批評の中にはフランスにおけるよりも早くロシアの《欧州通信》にまず発表されたものがあるというから、ゾラは印象派が台頭してくるフランス画壇の動向をいちやく外国に紹介していたことになり芸術批評家としてのゾラのこの功績はやはり大きいといわねばならない。

ゾラの芸術批評がとりあげている対象は専ら官展に出品されている作品

11) Ibid. p.p.237—246

12) F.W.J.Hemmings et Robert J.Niess, Salons, Publication Romanes et Française sous la direction de Maris Roques—LXIII—Paris,1959

であるが、ユイスマンスが官展と独立展の両方を彼の芸術批評の対象としたので全く重なる部分がある。それは1879年と1880年の官展である。

ゾラは芸術批評の対象として独立展を直接にはとりあげなかった。しかし独立展にも官展にも出品する画家はいた。こういう画家にあってはユイスマンスとゾラの両方からそのプロフィールが語られることになる。

又、ゾラは独立展そのものを批評の対象にとりあげなかったにせよ、官展にある印象派の画家の作品を糸口にして印象派の果している役割りにもふれているし、実際官展の審査から殆んど締め出されているとはいえ、当時の前衛としての印象派の存在は到底無視しえるものではなかったようである。事実年の経過と共に純然たる官展派の画家の間にも印象派の手法を自己の創作にとり入れる画家も出てくるようになる。

この様にたまたま同様の条件下におかれることがあったとはいえユイスマンスとゾラではやはり印象派の画家に対する対し方そのもの、及びその作品に対する評価は大きく食い違っていると云わなければならない。

まずゾラにあっては最初に芸術批評をかくことになったきっかけそのものがおもしろい。彼は1866年、それまで4年間勤めたアシェット書店をやめ *l'Événement*⁽¹³⁾ の文芸批評を担当しはじめた。この頃から彼は印象派の画家の溜り場である *Café Guerbois* に足しげく通い、そこでやりとりされる話から官展の審査会の内情などを聞き知って画壇に興味をもち、*l'Événement*の編集長 *Villemessant* に同紙の芸術批評を担当させて欲しいと願いだした。

こうしてゾラの要望が叶えられてはじめて同紙に掲載された芸術批評は作品の鑑賞に主眼をおいたものでなく、官展の審査委員をつとめる一人一人についての告発めいた暴露記事であり、審査をパスしなかったことを嘆いて自殺した画家をひきあいに出して審査会の体質そのものを向う、とい

13) この新聞は1865年と1866年の二年間しか続かなかつた。

ったようなゾラ独特の着眼点による官展派が絶大な力を誇る当時のフランス画壇の批判となっていたという。

ゾラが作品そのものにと目をとめる時ゾラの関心は次に述べるような点にあった。

Je me borne à dire si le sujet me plaît si l'ensemble me fait rêver à quelque bonne et grande chose si l'amour du beau respire dans la composition. En un mot, sans m'occuper du métier, je parle sur l'art, sur la pensée qui a présidé à l'œuvre.

(私は主題が私の気に入るかどうか、作品全体が善なる、又、偉大なるものを夢みさせるかどうか、作品の構成の中に美を愛する心が息づいているかどうかをいうに止める。すなわち一言でいうならば、私は手先の技巧にかかずらうことなく芸術について語る。作品を支配している思想について語る。)》¹⁴⁾

Hemmingsによればゾラの芸術観は20～25才の間に急速に変わりその後は生涯を通じて安定していたという。¹⁵⁾

文学、芸術を社会とのかかわりにおいてみるゾラの念頭には常に芸術家が社会において果す役割りとか、芸術が社会に及ぼす作用とかについての関心があった。上に引用したのもこうしたゾラにふさわしい芸術批評の観点であるといわなければならない。それにしても絵画に向えば必ずまず技巧的な面を仔細に吟味することに最大の関心を抱いていたユイマンズとゾラとは何という好対照を示していることであろうか。

3

ユイマンズの表面的なものに騙されない批評眼の鋭さと厳しさを如実

14) 《Salons》 p.41

15) 《Salons》—Emile Zola Critique d'art p.10

に物語ると共に、ユイスマンスとゾラの印象派の画家に対する態度の根本的な違いをも暗示するものとして Bastien-Lepage に対する評価について述べなければならない。

Bastien-Lepage は1848年に生まれているからユイスマンスと同年輩である。彼は当時官展の審査会で勢力のあったAlexandre Cabanel の門下生で官展派の画家であった。当時は正確でしっかりしたデッサンをする画家として定評があった人のようである。

彼はプリミティヴの画家達やFrançois Clouet¹⁶⁾の影響を受けていると同時に、クールベ風の、又、ミレー風の写実主義にも惹かれていたようであるといわれる。又、官展派の画家でありながらマネを思わせる作品をかくことがあったという。農村風景を好んで描いた。例えば田園風景を描いた場合、人物は勿論のこと木や草に至るまですみずみまで実に克明に描くような画家であつたらしい。代表的な傑作は1878年の官展に出品し、現在ルーヴル美術館にある《les Foins (干し草)》であるとされている。

さてこの Bastien-Lepage に対する評価であるがまずゾラの方からみていこう。

ゾラはマネを擁護して以来無論官展派には反対で印象派の画家達を支援する気持ちに変わりはなかった。しかし印象派の画家に共通の弱点として、官展派の画家に比べ技倆が劣っていると常々思っていたことが彼の芸術批評を読めば明らかになる。

印象派の画家達は色調といい光の扱い方といい確かに斬新なものをうち出してきているのだが、どうも作品を完璧に仕上げる、ということに意を用いていないようである。どれもこれも下絵の段階で筆が止めてある如く

16) 《フランソワ1世》の肖像画で有名な Jean Clouetの息子、16世紀のフランスの画家。父子共にフランス王室の宮廷画家をつとめる。写真のように精巧な肖像画を残している。

に思われる、このようにゾラは感じていたのである。印象派の画家達が傑作に価するものをつくりあげるのをゾラが待ちあぐねている間に官展派の画家達のとりわけ若い層の間に一定程度印象派の影響をうけた画家が出てくるようになるという事態がおこってきた。その一人がBastien - Lepageであった。ゾラは1879年の官展についての芸術批評の中でこの画家について次のように述べている。

Sa supériorité sur les peintres impressionnistes se résume dans ceci, qu'il sait réaliser ses impressions. Il a compris fort sagacement qu'une simple question de technique divisait le public et les novateurs.

Il a donc gardé leur souffle, leur méthode analytique, mais il a porté son attention sur l'expression et la perfection du métier. On ne saurait trouver d'artisan plus adroit, ce qui aide à faire accepter sujet et tendance. Les bourgeois sont ravis parce que ses tableaux sont peints avec une grande science.

(彼が印象派の画家に優る所は以下の点にある。彼は自分の印象を実際に作品の中に表現してみせることができる。彼は賢明にも次のことを理解している。すなわち単にテクニクの問題のみが一般大衆と革新者たち(=印象派の画家達のこと)をへだてているのである。だから彼は彼等の生き生きした感じ、彼らの分析的な方法を大事にした。しかし彼は表現と技術の完全さにも気を配った。彼以上に巧みな職人というものはそうそう見つかるものではない。これだけの力があってこそ主題も傾向も一般に受け入れられるというものである。事実一般の人々は大変喜んでゐる。なぜなら彼の作品が大した技倆をもって仕上げられているからである。)¹⁷⁾

一方ユイスマンスはBastien - Lepageの人と作品をどう見ていたであらう

17) 《Salon》 p.228

うか。

ユイスマンスは官展の批評を行なうときは必ず Bastien-Lepage をとりあげこれを攻撃した。それは執拗な程である。ユイスマンスはこの画家の人間も作品も全く気に入らなかったのである。

(IL)est un peintre d'une prodigieuse habileté, qui connaît son métier sur le bout du doigt.[---]tout en reconnaissant le très réel savoir de cet artiste, je ne découvre point, dans son œuvre, cet accent qui fait les maîtres.

(彼は驚く程達者な画家である。自分の技倆というものを熟知している。しかしこの芸術家のまぎれもない有能さを認めるものの私はこの人の作品に一流の芸術家が示すある調子が少しも見い出せないのである。)¹⁸⁾

これからもわかるようにゾラも語る通り Bastien-Lepage は非常に巧みな画家であつたらしい。ユイスマンスもそれは否定しない。しかしだからといって彼の場合それが直ちに賞賛にはつながらないのである。

…je perçois, malgré tout, une préciosité de facture truquée, une marche en avant, interrompue et habilement arrêtée pour ne pas déplaire au public.

M.Lepage est un sage insurgé;c'est le Polonais platonique des Beaux-Arts.

(彼のいろいろな優れた点は認めても私は偽りの気取りを勘づいてしまう。一步前に踏み出すが一般の人の気持を害さないために巧妙に中止し停止してしまう。ルパージュ氏はお伶俐な叛徒である。さしずめ美術におけるブ

18) Oeuvres complètes de J.-K.Huysmans, VI

L'Art Moderne(Paris, G.CRES ET C^E,1929) p.48

ラトニックなポーランド人といったところである。) ⁽¹⁹⁾

ユイスマンスはBastien - Lepageの人格上の尊敬できない点を更に抉っていく。

Pour tout dire, la candeur et la naïveté de M.Lepage me semblent par trop feintes;

je doute qu'il ressente une bien sincère émotion devant les pauvres gens qu'il représente.

(はっきり言えばルパージュ氏の無邪気さとか素直さとかは私にはいかにももっともらしく思われる。彼は自分が描く貧しい人々の前で本当に心からの感動を味っているのかどうか疑わしいと思う。) ⁽²⁰⁾

具体的に言うならばたとえば Lepage は百姓女の手の実を描ききっていないとユイスマンスはいう。せいぜい仕事を怠け放題怠けたがる自分の家の女中の手ぐらいにしか描けていないと。

一般の鑑賞者は目をそむけたくなるような酷い現実を突きつけられるよりは、多少とも美化されて描いてあることに感激するものかもしれない。しかし私は違くとユイスマンスはいう。そういう作品をみると画家のずるさが透けて見えるようだというのである。⁽²¹⁾すなわち彼は一般鑑賞者との摩擦をいやがって彼等の醜悪なまでの現実をはじめから避けて通るのであるがそれはユイスマンスの我慢のならないことなのであった。ユイスマンスの眼には、それゆえにBastien - Lepageは計算通り官展で非常な人気を獲得したとうつつたのであった。

19) Ibid. p.49

20) Ibid. p.49

21) Ibid. p.50

ゾラは Bastien -Lepage を印象派の良い面のみを巧みに発展的に消化吸収し得た官展派の中とはいえ期待のもてる若手と判断したが、ユイスマンスはあたかも猿まねは容赦しないとばかりにこの画家をつっぱねている。

M. Bastien -Lepage, dont le portrait de Mlle Bernhardt semble peint à la loupe et exécuté à [#]petites lèches sur une plaque d'ivoire, ne fait pas mal de regarder l'œuvre de M. Fantin-Latonur Il comprendrait peut-être, lui et les jeunes autres officiels modernistes, la différence qui existe entre des tableaux cauteleux et truqués et des œuvres droites et saines.

(微細に描き込んだ様がまるで虫眼鏡を使って描いたように思われる、そして象牙の板の上を小さな舌先で舐めあげるといった風の手法でベルンハルト嬢の肖像画をものしたバスティアン＝ルパーージュ氏はファンタン＝ラトゥール氏の作品をよくよく眺められるがよい。おそらく彼及び他の若い官展派の現代画家達は人を欺く作品と邪しまでない本道をゆく作品との間にある相違というものを理解されることであろう。) ⁽²²⁾

Bastien -Lepage の表面的な巧みさに納得させられてしまったのはゾラだけではない。ユイスマンスの1885年の官展についての芸術批評 ⁽²³⁾ から我々はDelacroixとBastien -Lepage の作品展が隣接して聞かれていたという事実を知らされる。しかも当時彼はDelacroix と肩を並べてもおかしいと感じられない程評価が高かったというのである。ユイスマンスは二人の面家の間に何らの差も感じることなく両会場につめかける一般鑑賞者達の無神経ぶりを嘆いている。

彼は同じく1885年の官展の芸術批評の冒頭でフランスでかつてみられな

22) Ibid. p.76

23) Bulletin de la SOCIETE J.-K.HUYSMANS N°36

かった風潮についても述べている。それは芸術がスポーツと同じく社交界の知的慰み物となり、作品展があちこちで開かれしかもどこもかも満員の盛況を示しているというのである。しかし諸新聞雑誌を賑わす芸術批評の質は一般に低く悪い意味のディレタニティズムがはびこり、一般の鑑賞者の鑑賞眼の育成に何ら寄与しなかったのが実情のようである。

こうした風潮に我慢し切れなくなってユイスマンスは1885年の官展批評の筆をとったことと思われる。ここで彼は Bastien-Lepage に決定的な侮蔑に満ちた評価を投げつけている。

Pour en finir avec les rapports que la lâcheté de la critique et que l'imbécillité des gens du monde ont tenté d'établir entre Delacroix et M.Lepage, l'on peut prévoir que cet indécent essai de concubinage est inutile. Delacroix rentre inviolé dans sa gloire si chèrement acquise. M.Lepage, depuis son exhibition, rentre dans l'éternel oubli.

Cette seconde mort nest, à vrai dire, qu'une insuffisante expiation du scandaleux vol de célébrité que cet industriel avait, de son vivant, commis.

(臆病な批評と馬鹿な社交界の連中がドラクロアとルパージュの間にうちたてようとした関係について述べ終るにあたって、この二人を関係づけようとする心ない試みが無用のものであると今から断言することができる。ドラクロアはあのような辛苦の果てに獲得した栄光に戻り、ルパージュ氏は作品展が済めば永遠の忘却に戻るのである。この第二の死は実を言えばこの絵画製造人にすぎない者が生前卑劣にも名声を盗みとる罪を犯していたことの償いとみればまだまだ不十分なものである。) ²⁴⁾

24) Ibid. p.288

以上Bastien -Lepage に対するゾラとユイスマンスの評価をみてきたが両者のそれはまさに正反対である。一体何がこの様な評価の違いを生み出しているのだろうか。ここにはゾラとユイスマンスの印象派の画家と作品に対する評価の違いが根深く潜んでいると思われる。